

令和6年度事業報告書

公益財団法人名古屋みなと振興財団

I 総括事項

公益財団法人名古屋みなと振興財団は、「名古屋港水族館」及び「名古屋港ポートビル及びガーデンふ頭臨港緑園」の指定管理者として、名古屋港における海事思想の高揚と海洋文化の普及並びにガーデンふ頭における賑わいの機会と場を提供する各種事業を実施した。

令和6年度の名古屋港水族館の入館者数は、約241万人となり、開館翌年度(平成5年度)の約291万人、昨年度の約244万人に次ぐ、歴代3位となった。また、名古屋港ポートビルの展望室、名古屋海洋博物館及び南極観測船ふじの入場者数は、3施設合計で前年度比約17%増の約55万人となった。

また、令和6年度は、名古屋港ポートビルが開館して40年目を迎え、年間の定例行事に加えて各種の記念事業・イベントを実施した。記念事業・イベントの実施においては、ガーデンふ頭諸施設の認知度の向上・回遊性の創出を目的に、例年にも増して財団全体で取り組んだ。

従来、名古屋港水族館のみ参加していた旅行会社が企画するスマホゲームキャラクターとのコラボイベントでは、名古屋港ポートビルも初めて参加し、施設の認知度の向上及び新規顧客層の開拓につなげた。また、初めての取組として、水族館の特別展「飼育係、南極に行く」の開催期間中、水族館の飼育員と南極観測船ふじの学芸員の2人の案内で、水族館とふじの両施設を巡り展示解説を行うガイドツアーを実施し、ガーデンふ頭諸施設の回遊性の創出に努めた。

1 公益目的事業

(1) 海事思想及び海洋文化の普及に関する事業

① 指定管理施設(名古屋港水族館)を活用した海洋生物の展示等(資料2)

海洋生物の展示にあたっては、展示テーマに沿った計画を策定し、生物の健康と飼育環境を適正に管理した上で生物の特性を引き出す展示を行った。また、飼育員や解説ボランティアによる解説を実施した。

ア 特別展は、飼育員が第65次南極地域観測隊に参加したことから、南極をテーマに「飼育係、南極に行く」を開催した。また、“花火”、“ハロウィン”、“タナイスの一種”、“クリスマス”、“正月・干支”、“バレンタインデー・ホワイトデー”、“春”など時機を捉えた各種展示を行った。

イ ゴールデンウィークと夏休み期間中は、混雑緩和及びサービス向上を目的にイルカパフォーマンスとシャチの公開トレーニングの回数を増やして実施した。

ウ シャチの「リン」は12歳を迎え、体長が5.1m、体重が2.0トンを超えるなど順調に成長し、排卵が確認されている。飼育下で日本最大のシャチである「アース」は16歳を迎え、体長が6.0m、体重が3.7トンを超え、背鰭・胸鰭・尾鰭の各鰭が大きくなるなど、オスの迫力が感じられる体形に成長し

ている。メインプールで実施するシャチの公開トレーニングは人気を集めている。

エ 3月25日にイルカパフォーマンスを「イルカパフォーマンス BLUE ECHO」にリニューアルし、北館開館以来、初めてパフォーマンスの構成、映像、BGM、ユニフォームを全面刷新した。BLUE ECHOには、「青い地球、青い海と共鳴しながら美しい地球を次世代へ繋げて行こう」という想いを込めている。また、パフォーマンスの開始前には、当館における海洋生物の研究について紹介する動画を上映している。

オ バンドウイルカの繁殖については、南知多ビーチランドから精液の提供を受け、当館の「ウィニー」に人工授精を行い、令和6年10月にオスが誕生した。令和3年10月に人工授精により誕生したオスの「レイ」は順調に生育している。腰部に湾曲的症候がある「ハッピー（7歳メス）」は、母親の「ウィニー」と一緒に展示プールで飼育を継続している。オスの繁殖個体「ハル（6歳）」と「ソラ（8歳）」は、神戸須磨シーワールドにブリーディングローンで移動した。

カ 当館で誕生したベルーガの「ナナ」と「ミライ」は順調に成長し、17歳と12歳を迎えた。「ナナ」は6月29日に初出産したが死産であった。

「ベルーガ公開トレーニング」は1日2～3回実施し、ベルーガの生態を分かりやすく紹介する「ベルーガの不思議な魚の食べ方」は、土日祝に1日1回実施した。

キ 黒潮大水槽で実施するイベント「マイワシのトルネード」は、照明と音楽を時節ごとに変更して好評を得た。

ク 公式ホームページでは、トピックスの頻繁な更新、飼育員による「スタッフコラム」掲載など最新情報の発信に努め、今年度のホームページセッション件数は5,162万件となった。また、SNSへの投稿にも努め、フォロワー数はフェイスブック47,181人（昨年度44,136人）、インスタグラム100,238人（昨年度88,735人）となった。

ケ マスメディアに対しては、話題性のある情報を提供するため、積極的なニュースリリース及び取材対応に努め、78件のニュースリリース（昨年度64件）と219件の取材対応（昨年度207件）を行い、多くのマスメディアに取り上げられた。

コ 夏期、年末・年始、春休みは、休館日に臨時営業を行った。また、ゴールデンウィーク及び夏休み期間には夜間営業を行い、17時以降の入館者には夜間料金を設定するなど集客に努めた。

② 体験プログラムを通じた海洋文化の普及（資料3）

小中学生（大人含む）又は小学生とその家族（保護者）を対象とした名古屋港水族館内でのスクール、講演会などを開催し、生物に関する知識を深める活

動を行った。

ア 「君もドリトル先生になれるか!」「もっと知りたい!ダーウィン教室」の2種のスクールを実施した。前者はバックヤード見学を中心とするもので、夏休み期間に16回開催し、143組418名が参加した。後者はバックヤード見学だけでなく、作業や実験・観察を行うワークショップ形式のもので、様々なテーマで8回開催し、38組103名が参加した。また、閉館後に夜間の生物の様子を観察する「ナイトウォッチング」を6回開催し、65組144名が参加した。

イ 名古屋市及び14都道府県が採用する小学4年生の国語の教科書で当館のウミガメに関する取組が紹介されていることから、今年度も市内の児童向けにウミガメレクチャーを実施し、オンライン開催を含む34件2,336名が参加した。また、執筆者自身が教員向けにオンラインレクチャーを行うとともに、市内の小学校を対象としたレクチャー&バックヤード見学会を実施した。前者には山形県や愛媛県など全国各地から10校の参加があり、後者には市内10校14名の参加があった。

ウ 学校団体や一般団体向けのレクチャーを積極的に受け入れた。オンライン及び館内外でのレクチャーや中学生の職場体験などの総実績は150件8,827名だった。

エ 海洋環境と生物の関係について解説する常設展示室「エコ・アクアリウム～海の未来を考えよう!～」において、環境教育やSDGs活動に取り組む関係機関との連携に努めた(例:名古屋市環境局:エコパルなごやのワークショップ開催やSDGs街(マーチ)への協力など)。

オ (公社)日本動物園水族館協会主催の「第34回日本動物園水族館設備会議」、京都大学野生生物研究センター主催の「2024年度第6回動物園水族館大学シンポジウム」を担当施設として開催した。

カ 平成23年度から実施している共同研究「名古屋港におけるスナメリの周年変動」の調査結果を社会教育に展開する試みとして、昨年度に引き続き「環境教育スナメリかんさつツアー」を実施した。館内でレクチャーを実施した後、海上からの観察を行い、76名の参加者のうち52名がスナメリを観察することができた。

③ 指定管理施設(名古屋海洋博物館・南極観測船ふじ等)を活用した海事に関する展示等(資料4)

名古屋海洋博物館及び南極観測船ふじに所蔵する資料を展示することにより、海事思想にふれあう場を提供した。また、名古屋港ポートビルが7月20日に開館40周年を迎えたことを記念し、特別展を始め様々な事業を実施した。

ア 開館40周年記念事業として、主なものでは以下の事業を実施し、開催期間中は多くの人出で賑わった。

事業名	内 容
企画展「名古屋海洋博物館のお宝展 2024」	普段展示していない所蔵資料の中から、特別展で紹介する資料を一部先行して展示
特別展「あの日、あの時の名古屋港 ～さまざまな始まりの物語～」(第1部)	ポートビル開館から 40 年間の出来事や過去に開催した特別展・イベントを紹介
学芸員によるガイドツアー	特別展と南極観測船ふじを巡るガイドツアー
特別展関連イベント「子猫のたけしと海の箱」	会場内に仕掛けられた謎を解き明かす参加型の謎解きゲーム
講演会「日本経済における港湾の役割～港からみる日本経済・中部経済～」	港湾が果たすべき役割等を名古屋港の過去から現在そして未来に向けた視点により講演(中京大学経済学部 客員教授 内田俊宏氏)
クルーズシップツアー「海から体感!名古屋港とセントレア」	名古屋港・セントレアを海から眺め、名古屋港の機能、魅力、ダイナミックさを体感
特別展「あの日、あの時の名古屋港 ～さまざまな始まりの物語～」(第2部)	①港町、②開港、③コンテナ時代、④親しまれる港、⑤情報化・自動化、⑥未来といった名古屋港の様々な始まりの物語を紹介(名古屋港の歴史コーナー等の改装後の展示と一体的に開催)

イ 南極観測船ふじと名古屋港水族館の両施設が連携して展示解説を行うガイドツアーを初めて実施した。第 64 次南極地域観測隊の広報隊員として参加したふじの学芸員、第 65 次南極地域観測隊に参加した飼育員の 2 人の案内で、ふじの常設展示と水族館の特別展「飼育係、南極に行く」を巡り、実体験を交えたリアルな南極の姿を紹介するもので、4 回開催し 42 名が参加した。

ウ 海や港の絵画、写真など地域住民による作品展示・鑑賞の場として、名古屋港ポートビル 2 階回廊ギャラリーを無料開放し、9 回の利用があった。

④ 体験プログラムを通じた海事思想の普及 (資料 4)

「帆船模型展」「ボトルシップ展」「ボトルシップ体験コーナー」「南極教室」「南極観測船ふじでの星空観察会」「工作教室(3D 立体カード工作教室及びペーパークラフト教室)」「港から始まる 2025 年～地上 53 メートルから眺める初日の出～」などを実施し、海事思想の普及に努めた。また、SNS を活用し、名古屋海洋博物館を始めとする各施設の情報発信に努め、フォロワー数はフェイスブック 762 人(昨年度 672 人)、インスタグラム 587 人(昨年度 404 人)となった。

⑤ 機関紙等による情報提供 ※名古屋港水族館 (資料 5)

ア 機関紙「さかなかな」を 4 回発行した。

イ 学習教材「かんさつノート」を生物の状況に応じて改訂し、来館した小中学

生の希望者に配付した。

ウ 生物情報紙「新着！海の生き物レター」を3回発行し、シャチやペンギン、国内初展示となる南極の魚メガネカモグチウオの話題などを来館者に提供した。

⑥ 学生の職場訪問の受入れ

ア 学生を対象とした職場訪問・体験学習などを受け入れ、名古屋港水族館及び名古屋海洋博物館などでの体験プログラムや解説を実施するとともに、学校団体等へのレクチャーを行い、海洋文化及び海事思想の普及に努めた。

イ 名古屋海洋博物館では、大学の学芸員課程を履修している学生の博物館実習を受け入れた。また、愛知大学で「ミュージアム展示論」の非常勤講師として講義を行った。

⑦ ボランティアの育成・活用（資料6）

ア 名古屋港水族館のボランティア活動は、140名の登録があり、タッチタンク、ペンギン、ウミガメ、鯨類の解説活動を実施した。また、コロナ禍以降休止していたボランティアによる自主事業を再開し、2月に工作教室、3月に絵本の読み聞かせ会を開催した。年間活動延べ人数は1,023人、活動延べ時間は1,470時間であった。

イ 南極観測船ふじは、解説ボランティア（11名）とメンテナンスボランティア（1名）、名古屋海洋博物館は、解説ボランティア（4名）とペーパークラフト工作教室指導員ボランティア（1名）の登録がある。ふじは、年間活動延べ人数144人、活動延べ時間369時間、海洋博物館は、年間活動延べ人数17人、活動延べ時間40時間30分であった。

⑧ 海洋生物の調査研究（資料7）

ア 今年度の繁殖については、ペンギン類がジェンツーペンギン1個体、アデリーペンギン4個体、ヒゲペンギン3個体の計8個体、ウミガメ類がアオウミガメ5個体であった。

イ 学術交流協定を締結している京都大学野生動物研究センター、京都大学ヒト行動進化研究センター、京都大学フィールド科学教育研究センター、岐阜大学応用生物科学部、三重大学大学院生物資源学研究科、金沢大学環日本海地域環境研究センターなどと共同研究を実施した。

ウ 京都大学東南アジア地域研究研究所及び野生動物研究センターと東海大学海洋学部の協力のもと、共同研究「名古屋港におけるスナメリの周年変動」を継続実施している。また、名古屋ECO動物海洋専門学校との産学協同教育に関する協定に基づき、同校から調査員の派遣を受けて、名古屋港ポートビル展望室からスナメリの定期観測を継続実施している。

エ 学術交流協定を締結している岐阜大学応用生物科学部と三重大学大学院生物資源学研究科などから、学芸員課程を履修している学生の博物館実習を受け入れた。

オ 日本動物園水族館協会、日本水族館協会が主催する研究会を始め各種学会などに参加し、研究発表を行った。

カ スタanford大学や高知大学などの研究機関と共に北太平洋でのアカウミガメ回遊経路調査 STRETCH (Sea Turtle Research Experiment of the Thermal Corridor Hypothesis)を2022年から5カ年にわたり実施している。バハ・カリフォルニア沖海域において、送信機を取り付けた2歳前後のアカウミガメ28個体を船から毎年放流(計4回)するもので、今年度は7月8日に放流を行った。

⑨ 研究会・ゼミナールの開催(資料7)

ア 共同研究講演会は、名古屋港水族館と共同研究を行っている常磐大学人間科学部心理学科の中原史生教授を招聘し、「名古屋港水族館のシャチは何弁で会話をしている?~野生下、飼育下でのシャチのコミュニケーション研究~」(参加者148名)を実施した。

イ 各界で活躍中の諸氏を講師に招き、港湾行政や海運の動向、変わりゆく港の役割などを幅広く学んでいただく「名古屋港港湾ゼミナール」(参加者80名29社)を実施した。

(2) ガーデンふ頭における賑わいの機会と場を提供する事業

① 名古屋港観光施設協議会の運営事業を始めとした観光振興事業(資料8)

ガーデンふ頭の観光施設等で組織された名古屋港観光施設協議会の事務局を務め、相互の情報交換や連携を図り、観光客誘致に向けた観光推進PR、誘致営業・宣伝事業を行った。

兵庫県西宮市、静岡県浜松市で観光展「ゴーゴー名古屋港!」を開催した。今年度は、PR動画やARコンテンツ等を用いて、より効果的な認知度の向上と来港意欲喚起に努めた。

団体旅行誘致のため、長野県・静岡県の幼稚園・学校関係者、旅行代理店を訪問し、名古屋港の最新情報提供及び旅行動向に関する情報収集を行った。

② 情報誌の発行

名古屋港の観光施設の情報を掲載した無料情報誌「ゴーゴー名古屋港(名古屋港ガーデンふ頭ガイドマップ)」を、県内外の各所に配布することにより、名古屋港の観光情報を発信した。

③ 各種観光団体及び市内交通機関との連携を図る事業

県内の観光団体に加入し、各観光施設との連携及び情報共有に努めた。また、市営交通機関（名古屋市交通局）や水上バス（ガーデンふ頭～金城ふ頭～中川運河）の利用者に対して、各施設の入場料の割引を行い、この地域の活性化と名古屋港内の回遊性の向上に努めた。

「名古屋港水族館パートナーシップホテル」制度を運営して、近隣地域の宿泊施設と連携を図り、積極的な集客に努めた。

④ 指定管理施設（ガーデンふ頭臨港緑園・ジェティ等）を活用したイベントの開催及び賑わいの場の提供

ガーデンふ頭地区におけるイベントの実施・誘致を通じ、港に賑わいを創出し、親しまれる港づくりを推進した。

ア ガーデンふ頭臨港緑園においては、各種イベントが円滑に開催されるように主催者と調整を行い、今年度は「第78回 海の日名古屋みなと祭」「名古屋港 Christmas Illumination 2024」「ISOGAI 花火劇場 in 名古屋港」などの大規模イベントが開催された。

イ 「名古屋港ガーデンふ頭ウェルカムポートフェスタ」（10月）、「みんなであげよう！名古屋港の凧揚げ祭り」（1月）を開催して、賑わいを創出するとともに名古屋港のPRや集客に努めた。イベント開催当日は、多くの来港者で賑わった。

ウ 緑地維持や花壇整備等を行い、緑豊かで快適な環境づくりの推進に努めた。

エ ポートハウス（無料休憩所）を来港者の音楽演奏・鑑賞の場として無料開放し、107回の利用があった。

オ ジェティ広場においては、警察署の交通安全啓発キャンペーンなど公共性の高いイベントを積極的に受け入れた。

カ 名古屋港ポートビル開館40周年記念事業の一環として、近隣の類似施設とのコラボイベントを実施し、両施設の入場で記念のノベルティを配布した。開業70周年と開館40周年のコラボ「中部電力 MIRAI TOWER×名古屋港ポートビル展望室 7040 ラリー ～海からも街からも名古屋の絶景独占中!～」(令和6.6.20～9.1)及び開館35周年と開館40周年のコラボ「東山スカイタワー×名古屋港ポートビル 3540 ラリー ～山と海から名古屋をながめよう～」(令和6.11.8～12.24)を開催した。

キ ガーデンふ頭諸施設の回遊性の創出を目的に、案内誘導サインを各所通路に設置した。サインは、ペンギンの足跡など子供の目に留まるデザインとし、案内誘導のルートは、名古屋港水族館の北館・南館の出口から、ポートブリッジを渡り、名古屋港ポートビル展望室、名古屋海洋博物館又は南極観測船ふじへ誘導するものとした。

ク 名古屋港水族館の単独券による入館後でも、半券提示で名古屋港ポートビル

展望室、名古屋海洋博物館、南極観測船ふじの3施設共通入場券を割引購入できるチケット販売運用について、水族館の特別展「飼育係、南極に行く」の開催初日(令和6.10.12)に合わせ、試行導入の形で販売を開始し、ガーデンふ頭諸施設の回遊性の創出に努めた。

(3) 防災機能の強化及び災害対策の取組

① 避難訓練の実施

名古屋港水族館において、大規模地震に伴う津波の到来を想定した避難訓練を11月に実施し、事前応募の約2,100名が参加した。

② 大規模災害発生を想定した基本協定の締結

葛西臨海水族園、新潟市水族館マリニピア日本海及び名古屋港水族館の三者による「大規模災害相互救援に関する広域連携基本協定書」(令和6年3月締結)に基づき、相互に災害対策訓練を視察するとともに、大規模災害時の救援活動等に関する情報交換を行った。

2 公益目的事業以外の事業

管理運営する施設の利便性を向上させる事業

ミュージアムショップ、レストラン、売店及び自動販売機を運営することにより、公益目的事業の一助とした。

また、名古屋港水族館法人サポーター制度は、平成26年2月の発足以来、生物の保護、繁殖研究など、水族館活動の更なる充実に貢献している。今年度末の会員数は、161社279口であった。

3 その他

収入確保に取り組むとともに、話題提供や認知度の向上を目的に各種イベントを実施した。

(1) 寄付の受入れ

① 水族館 de クルッと寄付

カプセルトイを利用して展示生物の支援金を募り、海生生物への親近感を高めながら、運営資金の確保に努めた。カプセルトイ(1回500円)は、水族館インフォメーション付近に設置し、寄付金は餌代に充当した(寄付額:9,966,500円)。

② 名古屋市ふるさと寄附金(ふるさと納税)

名古屋市のふるさと納税の返礼品として、入館券などを登録している。
(登録返礼品)

大人券1枚、大人券2枚、大人+小中券、年間パスポート(大人)
4施設共通券(大人)、大人券+御朱印帳

(返礼品登録口数、収入額)

421口 1,575,040円(3/31現在)

(2) オリジナル物品の販売

① 御朱印帳・魚朱印の販売

名古屋港水族館オリジナル御朱印帳（1冊 2,500円）と水族館版御朱印「魚朱印」（1枚 300円）を販売した。生き物の誕生日などの記念日には、限定魚朱印を企画した。

② オリジナルLINEスタンプの販売

名古屋港水族館の認知度や海洋生物への親近感の向上を目的にLINEスタンプを販売した（1セット120円又は50LINEコイン）。

③ 水族館漫画の販売

開館30周年を記念し、名古屋港水族館の建設計画から現在に至るまでを描いた漫画「水族館つくろう物語」は、令和4年に前編、令和5年に中編、今年度は後編を刊行し完結となり、ミュージアムショップにて好評販売中である。

(3) イベントの実施

水族館 de モーニング

開館前の名古屋港水族館の観覧とモーニングメニューを体験する特別イベント「水族館 de モーニング」は販売開始後に即日完売するほど大変好評であった（7/27 197名、8/3 192名、2/9 193名 計582名参加）。